

はじめに

女性が素潜りで貝や海藻等を採取する海女漁は、志摩漁村の象徴的な漁業形態である。日本列島のなかで志摩半島沿岸に最も多く存在し、その歴史性や技術の高さ、出稼ぎによる活動の広域性がこれまで注目されてきた。また、志摩という古来の民俗習慣を強く残す地域ゆえに、海女の民俗調査も盛んに行われてきた(1)。

海女とは、まず何より潜水して海底から獲物を採取する女性であり、漁業者たることが本源的な性格である。しかしながら歴史上も現在も、志摩に住む女性たちのなかで一年を通して海女稼業のみを営む者、換言すれば海女を専業とする者は基本的に存在せず、季節や海の状態により、他の漁の補助や農作業、水産加工、小商売、出稼ぎなどを織り交ぜながら暮らしていた。本稿では触れないが、江戸時代には難船の救助や沈没した荷物の引き揚げにも海女が活躍し、浦村の経済に小さからぬ影響を及ぼしていた(2)。

海女とは志摩漁村に住む女性の一生業形態なのであり、必ずしも専門的な「職業」なのではない。さすれば志摩の海女文化の総体を理解するためには、海女の様々な「兼業」の特質を明らかにする必要がある。その兼業の一つに旅人や都会人の好奇心に応え、海女の姿を見世物とし、見物料を得る「稼ぎ」がある。

観光客を相手とする海女生業は、現代でも鳥羽市のミキモト真珠島や和歌山県の白浜などで見られる形態で(3)、彼女らは「観光海女」と呼ばれる。戦後、精力的に離島や漁村の民俗を調査した宮本常一は、観光海女は志摩を中心に発達し、次第に福井県東尋坊、千葉県御宿、さらに能登半島沖の舳倉島にも広がっていったこと、宴会に出て客のもてなしをする海女(芸者海女)も出現したことを指摘した上で、「いずれにしても、人の働く姿が、観光対象になるようになったということは、その職業の衰亡を物語る以外に何ものもないであろう」と厳しく断じている(4)。確かに漁業者であることが海女の本質だとすれば、見世物となる海女など、邪道でしかない。だが、「観光海女」は近代以降になって、海女漁業の衰退と共に新たに生まれた稼業なのであろうか。またそれは、海女の存在を貶めるだけのものなのか。

前近代の主に都市文化のなかで、海女に対してしばしば好奇のまなざしが注がれ、特に浮世絵などでは半裸体の艶めかしい肢体が描かれたところから、エロチックな魅力として海女が語られることが多い。「観光海女」も、外来者の性的関心に応える哀れな見世物に過ぎなかったのか。歴史的に海女は、社会からどのようなまなざしで見られ、いかなる魅力ゆえに人気を集めたのだろうか。

本稿は、「見物される海女」の歴史を辿ることを通して、専ら「性的視線」という観点から論じられてきた従来の偏った見解を修正し、海女の多様な魅力を明らかにすることを課題とするものである。

一、古代～近世の海女の表象

1、詠われた志摩の海女

古来、多くの都びとによって海女は歌に詠まれた。それを本格的に検討する能力は持ち合わせないため、人口に膾炙した『万葉集』の数首を掲げ、後段との関係で注目すべき論点のいくつかを示すに留めたい。

モチーフの一つは、海女漁の獲物である鮑について、実際には巻き貝の一種なのであるが二枚貝の片割れと見なし、「片思い」の比喩に用いるものである。代表的な歌に巻 11-2798「伊勢の海人の朝な夕なに潜ぐといふ 鮑の貝の片思にして」がある。その鮑を取るのが海女という女性であることも、恋の歌として意味があるだろう。

鮑（鮑）にはまれに珠玉が含まれることがあったが、それを恋する女性になぞらえる歌も詠まれる。巻 7-1322「伊勢の海の 海人の島津が鮑玉 取りて後もか 恋の繁けむ」が良く知られている。前近代にも海女がアコヤガイを採り、わずかな天然真珠を献上品や薬種としていたように、現実の海女漁と玉との結び付きは確かに存在した。だが、貝中の実際の玉ではなく、「海神」の持つ「白玉」と海に潜く「海人」を詠う歌も、巻 7-1299 から 1303 の一連の歌を始め、少なくない。海幸彦・山幸彦の神話伝説に登場する潮盈珠・潮乾珠を連想させるが、竜宮で得られる2つの珠を、海中に潜る海女ならば得られるとの見立てであろう。

いずれにしてもこうした歌は、海女を実際に見て詠まれたものではない。何より前掲の歌が「伊勢の海」での海女としている如く、伊勢と志摩が混同されている。この点は、海女は登場しないものの、巻 4-600 に「伊勢の海の磯もとどろに寄する波 畏き人に恋ひわたるかも」と詠まれることなども参考になる。「磯もとどろに寄する波」は明らかに志摩の海のイメージで、伊勢の海ではありえない。都びとは伊勢の海も志摩の海も、ましてや海女の姿も見ず、伝聞と伝説の知識のみで想像の海女を詠んだのである。

2、江戸時代の浮世絵に見る海女

江戸時代中期以降、江戸などの都市文化のなかで海女が浮世絵に盛んに登場する。古代以来の連続面としてまず指摘したいのは、しばしば二見浦の夫婦岩を背景に海女が描かれる点である。二見浦は志摩国ではなく伊勢国の内であり、参宮前の垢離場として伊勢神宮との関わりも深い。海女は不在の地である。伊勢と志摩の混同から、実態とは無関係に、海女と二見浦とが結び付けられた。そしてこの虚構の結び付きは、近代以降まで続くことになる。

また、海女と玉との関係も引き続き深い。特に、讃岐国志度浦に伝わる玉取姫伝説をモチーフにした歌川国芳の作品がいくつも残されている(5)。7世紀に中国の皇帝に嫁いで居た藤原鎌足の娘が亡父に供物を送ろうとするが、海底から出現した竜神に玉を奪われてしまう。鎌足の息子の不比等は、玉を取り返すために志度に向かい、出会った純情可憐な海女「玉藻」に龍宮に潜入して来るように頼む。玉藻は竜神と格闘の上、乳房の下を自ら短刀で切り裂いて玉を隠し、綱の引き揚げを合図して、不比等に玉を渡してから果てる。海女漁において海底に潜る海女を船上から綱や竿で引き上げる営みを前提に、万葉集でも

モチーフとなる海神、玉と結び付いた伝説話である。

さて、海女の「玉藻」が龍神と闘う画面には、不自然なほど大きな比重を占めて蛸が現れる。19世紀初めに描かれた葛飾北斎の有名なモチーフ、海女が蛸とまぐわう構図を想起させる(6)。既に多くの論者が注目したように、半裸体である海女を描く浮世絵は、春画としての側面があった。幕府による風俗統制が行われるなか、あくまで「職業人」としての海女を描くことで世間の需要に応えつつ、規制を逃れようとした結果である。

だが、それだけでは海女と共に龍宮や龍神、そして蛸が登場し、かつ蛸と交わることの説明になってはいない。蛸は古来、その独特の風貌から妖怪や怪物として描かれることが多く、明らかに異界の生き物と認識されていた。海女自体、陸上で生活者とは違い、海底を知る異能の者として、一種畏敬のまなざしを注がれていたとしても不思議ではない。地上と海底の間、そして海底に住む、あるいはそこに潜むとされる竜宮に居る異界の動物と人間との間、それら両界をまたぐ両義的な存在として、海女はイメージされたのではなかろうか。二見浦の夫婦岩を背景に蛸と交わる海女の姿は、扇情的な春画としての側面に加え、前代以来の伊勢と志摩の混同という背景を持ちつつ、異界に通じる者というエキゾチックな海女の特性を表現するものだったのである。

3、江戸時代の見物される海女

江戸時代に都びとは、現実の海女と何らかの接点を持っていたであろうか。寛政9(1797)年に京都、大坂の版元から刊行された『伊勢参宮名所図会』(7)は、上方の文人らの手により、実地での取材に古記の由来・伝聞などを交えて、京都から伊勢に至る街道沿いや神宮門前町の様子を挿絵入りで詳しく記したものである。その中に、津を少し過ぎ、現在の香良洲神社の項で次のような注目すべき記述がある。

▲小加良須御前社 からの名ハ今島貫村より東の森にあり、当社ハ矢野村の内にて社地ハ海岸也、岸の松林ハ至而勝景にして末枝を洗ふ墨の江にも勝れり、此磯より漁舟をかり乗れば津の入海に着也、其船路釣をたれて魚を得さしめ又あまのかづきなどさせて興とす

香良洲神社の沖から津まで漁船を借りての舟運があるが、船上での楽しみとして魚釣りと共に「あまのかづき」をさせることが挙げられているのである。だが、この地域は遠浅の砂浜で、鮑や栄螺などは採れず、海女漁があったはずもない。万葉集の時代から伊勢と志摩の海はしばしば混同されており、恐らく志摩での事象を津近辺の海辺で行われているものと誤記したのではなかろうか。ついでに言えば、津の町近くの阿漕浦に関する部分でも、平治伝説を紹介するなかで、平氏が神宮の贄漁を妨害したとし、「いよいよ贄の蟹を妨げる」という記述が見られる(8)。

もちろん、これを以て志摩で海女漁の見物が行われた確実な証拠とすることはできない。だが肝心なことは、場所の問題は措くとしても、海女を雇って潜らせ、その様子を見物するという娯楽が存在し、それを上方の文人たちが知っていたという事実である。なお、問題の二見浦については、立石(夫婦岩)に言及した後、「汐の干ぬればいろへの貝を拾ひ藻を取、ある時ハ網引などしてあまのしわざとも甚興あり」と記される。仮名書きのため、「あま」が女性と特定することはできないが、この地での漁業の見物を「興」として

いることは、確実に見てとれる。

さて、江戸時代中に二見浦での海女見物が間違いなく存在したことを示す史料がある。二見荘区に残る「旧記」(9)の明和9(1772)年の記述であり、「観光海女」の歴史を考ええる上で極めて重要な史料である。

一、辰ノ三月十九日、京都御所長橋之局御参宮と申、山田御師七之神主并内宮藤浪様より御馳走有之、立石浜ニ新御休所出来、廿日に浜へ御出、四つより八ツ過迄御遊、あまをよび蛸をとらせ、綱(網カ)を引かせ御慰有之候、御塩殿へも御寄も可有哉と掃地入念、郷中神役老人宛相詰メ候得共、御立寄無之候、村年寄ハ堅田ニ付ケ指上申候、長橋之局とハ申候得共、仙洞御所と申風聞ニ候

天皇側近の女官である長橋局が、伊勢参宮後に二見浦に遊覧に訪れた。上記「旧記」によれば、実は長橋局ではなく仙洞御所であるとの風聞が立ったと言う。該当するのは、明和7(1770)年に譲位した女帝の後桜町上皇であろうが、そのような事実はなく、神宮長官の公務日記(10)を見ても、長橋局であったことは間違いがない。御師として外宮の七神主(常古)と内宮は藤波氏が接待に当たり(11)、立石浜(二見浦)に新たに休息所を造り、参宮翌日の遊覧に供した。「四つより八ツ過迄」とあるから、昼前後のゆったりとした海辺遊びであったし、村人たちが掃除をして備えていたのに御塩殿への立ち寄りもなかったとあれば、長橋局にとってよほど気に入った遊興だったとみえる。その「御慰」=娯楽の内容が、網漁と共に「あまをよび蛸をとらせ」の様子の見物だったのである。

だが二見浦では蛸や栄螺は採れず、海女漁は存在しない。「あまをよび」とあるのは、現地の漁業者ではなく他所から呼び寄せたこととも読める。志摩から獲物の魚貝と共に海女を招き、虚構の海女漁を演じて見せたのではなかろうか(12)。

二見浦は伊勢国内だが志摩国との境界に位置し、また浮世絵で海女が描かれる舞台でもあった。この地で「作られた」海女漁が演じられていることは、注目に値する。むしろ、こうした海女実演が行われていたからこそ、その情報を元に想像の世界において夫婦岩を背景とする海女が描かれたのだと考えた方が自然なのかもしれない。

江戸時代の参宮客が書き残した道中日記(旅日記)で二見浦の様子を記すものは数多いが、管見の限りこの地での海女見物の記載は見られない。武家領主層や皇室関係者などに対する特別なサービスとして行われたものであろうが、どのように海女を呼び寄せ、雇ったのかなど、詳しいことは残念ながら分からない。

二、明治期の見世物文化と海女

1、見世物小屋の海女

近代以降、見物される海女は新たな展開を示す。志摩国、あるいは二見浦で都びとを迎えるのではなく、都市に出向き商業主義に踊らされ、見世物小屋において本来の海女の姿とはほど遠いショーに身を落とす者が現れた。

早くには明治5(1872)年に京都の鴨川において、海女が鯉を掴み取る興行の申請が行われた。川で鯉を掴むなどという海女漁とは全く無縁の見世物であるが、「裸体禁止ノ折柄」「一時遊観ノ為メ」の計画として認められないばかりか、出願者らが説諭されるという結

| 明治期の見世物小屋の海女 | | | | | | |
|--------------------------------------|------------|----|-------------|---|--------------------|---------|
| No. | 年次 | 月 | 場所 | 内容 | 典拠 | 備考 |
| 1 | 明治5(1872) | 6 | 京都・鴨川 | 海女の鯉つかみ興行願い | 「京都新聞」(『日本初期新聞全集』) | 不許可 |
| 2 | 明治10(1877) | 4 | 名古屋・大池 | 志摩の海女の鯉取りの見世物 | 『近代歌舞伎年表・名古屋篇』 | |
| 3 | 明治10(1877) | 6 | 東京・浅草蔵前 | 玉取姫(海女)の大人形。 | 『明治の演芸(一)』挿絵有。 | |
| 4 | 明治14(1881) | 1 | 大阪・千日前 | 海女の鯉つかみ(此頃大評判) | 「朝日新聞」 | |
| 5 | 明治14(1881) | 3 | 東京・下谷広徳寺境内 | 鳥羽海女、池に鯉他の川魚を採らせる | 「読売新聞」 | |
| 6 | 明治14(1881) | 8 | 岡山・京橋河原 | 海女(伊予国温泉郡)の鯉つかみ。 | 「山陽新報」 | |
| 7 | 明治15(1882) | 7 | 名古屋・七ツ寺境内 | 海女の鮑捕り。水中の妙技。 | 「愛知新聞」 | |
| 8 | 明治15(1882) | 7 | 岐阜・伊奈波桜町広小路 | 婦人が蟹女の姿に模擬し海底に飛入り鮑採。 | 「岐阜日日」 | |
| 9 | 明治17(1884) | 2 | 東京・佐竹の原 | 伊勢の海土の水芸。花笠、伊勢音頭、池に飛び込み異形な業。 | 「読売新聞」 | |
| 10 | 明治17(1884) | 12 | 仙台・玉沢横丁 | 伊勢海女、伊勢音頭鮑捕の水芸。 | 「奥羽日日新聞」 | かなり入もある |
| 11 | 明治18(1885) | 10 | 東京・浅草六区 | 私設水族館。「蟹女(あま)の子等が状(さま)」 | 「読売新聞」 | |
| 12 | 明治19(1886) | 10 | 大阪・千日前 | * 大火災。海土の小屋の堀溜の水が役立つ。 | 「朝日新聞」 | |
| 13 | 明治23(1890) | 12 | 仙台 | 海女の水芸 | 「奥羽日日新聞」 | |
| 14 | 明治29(1896) | 1 | 大阪・千日前 | 海女の鯉とり(吉田席) | 「商業資料」3巻1号 | |
| 15 | 明治29(1896) | 4 | 東京・浅草公園 | * 火災。水潜り海土の見世物小屋に燃移り… | 「風俗画報」114号 | |
| 16 | 明治30(1897) | 1 | 大阪・千日前 | 伊勢海女の鯉つかみ(吉田席) | 「大阪朝日新聞」 | |
| 17 | 明治30(1897) | 5 | 福岡・櫛田神社境内 | 鳥羽の海女の見世物 | 「福岡日日新聞」 | |
| 18 | 明治30(1897) | 6 | 長崎・八坂町神社内 | 鳥羽の海女の見世物 | 「鎮西日報」 | |
| 19 | 明治31(1898) | 1 | 大阪・千日前 | 海女水中の技術(第三改良席) | 「大阪朝日新聞」「大阪毎日新聞」 | |
| 20 | 明治33(1900) | 1 | 大阪・千日前 | 海女の鯉つかみ(横井座北席) | 「大阪朝日新聞」「大阪毎日新聞」 | |
| 21 | 明治34(1901) | 1 | 大阪・千日前 | 海女の水芸・松本海土水芸社中(第三山田席)、同・江川海土太夫一座(第一井筒席) | 「大阪経済雑誌」第九年11、12号 | |
| 22 | 明治34(1901) | 2 | 京都・六角田村席 | 海女の見世物。寒中婦人の水泳、裸体婦人の見放題。四人の鳥羽浦の蟹女、紅禪一着、水溜に飛込。唄、曲芸、銭投げを求む。 | 「京都日出新聞」 | |
| | 明治35(1902) | 1 | 大阪・千日前 | 海底旅行(山田席) | 「大阪朝日新聞」 | |
| | 明治39(1906) | 7 | 東京・久松町明治座 | 浦島の所作や海女の手踊り | 「東京朝日新聞」 | |
| | 明治42(1909) | 3 | 熊本・本妙寺黒門下 | 海女の水芸 | 「読売新聞」 | |
| | 明治43(1910) | 9 | 東京・浅草六区 | 海底館(ルナパーク内) | 「東京朝日新聞」 | |
| | | | | | | |
| *『明治の演芸』、蹉跎庵主人「見世物興行年表」(HP公開)を参考に作成。 | | | | | | |

果となった(13)。

だが、明治14年正月には大阪千日前で海女の鯉掴みの見世物が始まり人気を集め、以後正月恒例の興行となった(14)。そして東京や岡山などでも同様のショーが行われたらしく、また海女の鯉掴みを描く色刷りの大津絵節も残されており(15)、当時、大いに評判を取った様子が窺われる。なお大津絵節の詞書きには「龍宮海を立のいて」という記載があり、古代以来の伝説の継承が見られる。獲物が鯉ではなく鮑であったり、内容が不明のものを含めれば、名古屋、仙台、岐阜、博多、長崎での事例も確認でき、明治前期の海女の見世物が、大都市から地方都市にも広がっていたことが分かる。

見せ物小屋の海女の様子を少し詳しく見てみよう。明治17(1884)年2月、東京の下谷区佐竹の原で「伊勢の海士の水芸」が行われた。木戸銭は1銭で、舞台前に1間半四方の池が穿たれ、水が湛えられている。囃子に連れて23,4歳と22,3歳の女性2人が対の衣装を着て花笠をかぶり登場し、拍子に従って泣くがごとく訴えるごとく声を発して「伊勢音頭」を唄う。その有様は「抱腹絶倒」に似る、とも評されている。彼女らは一旦楽屋に戻り、再び登場した後、裸体となって躍然と池中に飛び込み、浮いては沈み「異形な業」を50分ほどにわたって見せたが、寒中のため唇色も紫黒となり、肌の色も赤色を帯びていたという(「読売新聞」)。「伊勢」の海女というのは当然「志摩」の誤りであろうが、念が入ったことに彼女らが「伊勢音頭」を唄うなどと、興行側により伊勢と志摩の意識的な混用がなされている。

明治34年2月に京都の六角堂辺で行われた見世物では、「志州鳥羽浦」に住む20歳前後の「海蛸」(海女)4人が、まずは浴衣姿で登場する。海女の水泳だけでは芸がないとして、弁士の口上の後、彼女らは次のようなショーを演じた。

口上の終るを待つ間遅しと紅褌一着と為り、漆塗の一丈角位の水溜りに飛び込み、直に其脇に並べたる挿盆を頭に載せて何だか唄ひ、次に二人が二人の肩車に乗りて小さな傘を翳し、同じく何か海人(あま)らしき歌を唱ひ、夫が終りて口上言の居る床の下に四人並びて立つては、口上は『これがこのあまの楽(たのしみ)、御客様には一銭なり二銭なり、水中に御投げ下されば難有い仕合』といふ。見物人は誰か銭を投げて拾(ひろわ)さぬかね、夫を見ま升(せ)うとお互に顔を見合せ、いはゞこの處根競(こんくらべ)の体、僕は仕方なく白銅を一つ投げ込めば、四人の海蛸は忽ち潜て、臆(やが)て一人が拾ひ口上に示し、口上は五銭難有といふ時海蛸は床の下に吊しある筈に投込む。(「京都日出新聞」)

漆喰製の1丈(約3尺)四方の水を湛える人口施設を設けるのは東京の例と同様であるが、彼女らは紅褌という姿ですり鉢を頭に載せ、2人が2人を肩車し、傘をかざして海女唄を歌うという一種の曲芸を演じる。そして観客に向かい投げ銭を求め、水中に潜って銭を拾うという形で水中の業を披露した。投げられた銭を海女が拾うという姿は、後述するように他にも様々な形で見られるものである。

このショーを報じた新聞記事の冒頭には「寒中婦人の水泳、その残酷なる状(さま)と裸体婦人の見放題」が人気の要因だとしている。明治15年7月に名古屋の大須・七ツ寺境内で行われた海女の「鮑捕」の見世物では「水中の働き如何にも見事なるゆへ、見物人は何れも呆れ果て、水底に何か仕掛でもありはせぬかと疑ふ者もあると云ふ」と報じられ、その特殊な身体能力が讃えられてはいる。海女の本領ではない鯉掴みにしても、水中で素

早く魚を捕らえる様子が人気を呼んだ面は無視できない。しかし、先の東京下谷での事例などと合わせ見れば、基本的には卑俗でややグロテスクな、そしてやはりエロチックなショーとして演じられていることは間違いなからう(16)。

なお、明治43年11月16日付けの「伊勢新聞」が「志摩と高齢者(三) 研究すべき蟹」との記事のなかで「東京浅草、大阪千日前、京都の新京極などで海女の見せ物をやっておるものは皆此志摩の海女である」と指摘しているように、これら見世物小屋の海女の多くは、志摩から都会へ出稼ぎに出ている者たちであった。彼女らは、一時的にせよ漁業者たることを捨て、実態とはかけ離れた姿を見せ、都びとの好奇心に媚びることで収入を得ていたのである。

2、御木本真珠養殖場と海女―仕組まれた海女の「実演」―

同じ時期に都市の見世物小屋とは別の形態で、志摩地方でも、御木本真珠養殖場において見物される海女が登場した。御木本幸吉は明治26年に半円真珠の養殖に成功した後、英虞湾などの漁業権を買い取り、真珠養殖場を展開させる。当初の真珠養殖は、海底から真珠の母貝となるアコヤガイを海中から捕獲し、核入れをした後にまた海に戻す「地蒔き」と言われる手法を採ったが、海中に潜る作業を担ったのが、御木本に雇われた志摩漁村の海女たちであった。アコヤガイが赤潮の被害に晒されそうになった時に、貝を海底から救い上げる作業に従事することもあった(17)。

大正期以降、筏を用いた垂下式の真珠養殖法が導入されていくことで、養殖場における海女の必要性は低下するが、御木本は真珠加工の従事者などとして彼女らを雇い続ける。海女たちの仕事は、真珠養殖やその商品化に関わる領域だけではなく、真珠の宣伝・販売の戦略分野にもあった。御木本は、要人が志摩を訪れると好んで真珠養殖場を案内したが、その際に海女の作業を見物させているのである。早い事例では、明治32年4月26日に時の農林大臣曾祢荒助が巡察に来た際、数個の真珠貝を得て喜ぶのを見た御木本は、地元海女を雇い真珠貝を採取させてみせたところ、農林大臣は「ホトホト満悦の体」で、「源氏の君の須磨の磯辺の風流」になぞらえたのか、土産にすると海女一同を招き一緒に写真を撮った、と報道されている(18)。

大臣の接待の成功に味を占めたのでもなからうが、明治44年5月に明治皇后(昭憲皇太后)を迎えた時には、極めて用意周到に、かつ虚構を含む海女実演が大規模に繰り広げられた。皇后は伊勢参宮の後、5月21日に二見遊覧を訪れるのだが、御木本はその数日前から二見館に詰め切り、潜水前後に海女らが体を温めるための六角形の暖小屋2棟を海岸に設えた。そして、厳寒時にも1時間以上の潜水に堪えうる熟練の海女、しかも17,8歳から27,8歳までの若い者を40余名選抜し、作業に不敬なことがないように「白襯衣、白股引に白き湯巻を纏はせ」、5艘の真珠採船に10人ずつ分乗して漕ぎ出した、とする。

この時期には漁村ではまだ半裸体で海女漁を営むことが一般的だった。だが「大阪毎日新聞」(19)の報道によれば、皇后来訪時の海女の着服について、白木綿の半袖襦袢と木綿の腰巻きは平素のことで、今回はこれに加えて失礼のないように白の猿股を着用した、としている。つまりこれ以前から、恐らくは先の曾祢農林大臣来訪時にも、御木本養殖場の海女は半裸体ではなく、見物客を意識した白磯着姿だったのでなかろうか。志摩にお

ける海女の白磯着の普及時期や要因には諸説あるが(20)、後述する博覧会での海女を含め、真珠養殖場での衣裳が一つの基準となり広まっていった可能性を考えて良いだろう。

さて、二見浦での皇室関係者の海女見物は、先に見た明和9(1772)年の長橋局の事例を想起させる。その際には鮑採りの作業を見せたのだが、場所は同じ二見浦でも今度は御木本が仕掛けた実演ショーなのであるから、獲物は真珠貝(アコヤガイ)でなければ意味がない。だが、二見浦には鮑や栄螺と同様、真珠貝は棲息しない砂浜である(21)。

「伊勢新聞」が報じるように、御木本は数日前から15万余個の貝のうちで美しい真珠を孕んでいると思われる貝を、予め夫婦岩東方の海に放っておいたのである(22)。その海上で船を止め、海女が代わる代わるに潜って真珠貝を採って来た。海岸の休憩所で待つ皇后の前で、真珠養殖場の支配人の久米楠太郎と東京工場支配人の斎藤真吉の2人が貝殻を開き御覧に供したところ、十数個は見出せなかったものの、他には全て「金色銀色の漫然たる光沢を有する」真珠を得、皇后に献じると「最とも御満足」の様子で、御木本は「感涙に咽」んだという。

この2か月後に鳥羽線が開通するが、その祝賀式典の余興として御木本は海女作業を披露することになった。そして、その服装は皇后を迎えた時と同様であった(23)。

さて、同じ年の6月25日付の「伊勢新聞」は、「蟹婦作業場新設計画」との見出しで御木本の計画を報じている。この記事はまず「従来鳥羽を訪問する遊客の目的は日和山の眺望と菅島の鮑取作業の遊覧とに在り」とし、この時点で海女漁の見物が、鳥羽市街の後背にあり海を眺望できる日和山と共に、観光の目玉となっていたことを報せる。御木本は、鳥羽線開通後は遊覧客が一層増加することを見越して、鳥羽の停車場附近「縁期松角より戸島に至る海面一帯」を借り受け、海女の鮑採り作業を見せることを考えた。ただ、ボラ漁には差し支えないものの、海鼠や貝類、海草類の採捕に影響が出るため、漁業組合との間で交渉が行われる。7月2日の報道記事によれば、鳥羽組合に50円、小浜組合に150円を弁償する契約を結んだという。直接的なつながりが確認できる訳ではないが、これが後のミキモト真珠島につながっていったのではなかろうか。

御木本は、真珠の養殖自体よりも、その販売戦略の巧妙さゆえに「真珠王」の名を冠されることになった。彼は、真珠という宝飾品の販売のためには観光客の誘致が必要であり、そして鳥羽志摩と真珠の印象的な結び付けが不可欠だと考えたのであろう。

なお、大正12(1923)年5月には、後の昭和天皇后となる良子女王が鳥羽を訪れるが、その様子を報じる「伊勢新聞」によれば、鳥羽の樋の山に登り、そこから望遠鏡で3里を隔たる答志島の海女の作業を見物し、「御感興あらせられ、柴田本県知事を顧みて御下問あり」とある。この状況で偶々答志島の海女が漁をしていたとは考えられず、予め仕組まれていたものであろう。大事なことは、江戸時代の長橋局も、先の明治皇后や良子女王も、皇室関係者であると共に、みな女性だという点である。

この時の答志島海女や、御木本が鳥羽湾の一部を借り受けて観光客用に作業をさせた海女は、真珠を採っていた訳ではない。だが、志摩の海女と真珠との結び付きは、御木本の意図を超えて強まって行くことになる。

三、大正・昭和前期の海女ショーの展開

1、博覧会の海女館

地域ごとの伝統的名産品や特有の技術を展示公開する博覧会は、大正末期から地方都市で盛んに開催されるようになるが、そのなかで「海女館」という施設が登場し、人気を集めた(24)。ここで実演する海女は、人工的に造られた水槽中を潜るという形態としては見世物小屋の系譜を引くものの、海女漁と無関係な荒唐無稽の演舞や曲芸などはなく、主として真珠を採って来る姿を見せ、工芸品としての真珠の宣伝や販売も行われる。やはり志摩の海女が出稼ぎで活躍するのだが、御木本幸吉が直接に関わった形跡はなく、真珠養殖自体が御木本以外の者に拡大していたことに拠るのであろう。

博覧会に海女が登場する初発は、確認できる限り大正5(1916)年に東京の上野公園で開催された「海事水産博覧会」で、「海底館」という施設において海女が鮑採りの実演を見せたものである(25)。ただしこれは海女自体に特化した施設ではなく、あくまで水族館的施設における一実演ショーであった。続いて大正9年には京都の岡崎公園における「全国勸業博覧会」において、貯水池に鳥羽の海女が潜水し、鯉や鮒を捕獲するのを見せた。これは、見世物小屋文化の海女に近似している。

昭和5(1930)年に東京上野公園で開催された「日本海海戦25周年記念 海と空の博覧会」において、以後の博覧会の定番となっていく「海女館」という施設が登場する(26)。竜宮城を模した建物で、内部には大きな水槽が設けられ、そのなかで海女が真珠採りの実演をするのである。海女が潜水する姿自体を見せる施設であり、かつ竜宮城と珠玉とが登場する古代以来の伝承を踏まえつつ、近代以降に新たに産業として発展していた真珠産業を宣伝するものであった。以後30年足らずの間に「海女館」(「海女実演館」を含む)の名称を取るものに限定しても32の博覧会で見られ、類似施設を含めれば計41例にのぼる。かつ、竜宮城風の建物を伴っていたことが少なくとも17例で確認できる。当時、博覧会を請け負う専門業者(ランカイヤ)が、それぞれ得意な領域を持って活躍していた。建物の類似性だけでも、同一の興行師の存在が推定される(27)。

博覧会に志摩の海女がどのように登用されたのか、またその実演の様子を、昭和6年7月11日から8月20日の間に小樽で開催された「小樽海港博覧会」から見てみよう(28)。

この博覧会での水槽は幅36尺(約11m)、奥行き9尺(3m弱)、水深8尺5寸(約2.5m)の規模で、硝子張りで造られた。博覧会を主催した協賛会では海女の雇用に苦心するが、北海道庁が三重県庁を紹介し、県庁の斡旋で志摩水産学校長の飯間本一氏に連絡を取ったという。そこから志摩郡和具漁業組合に人選を依頼し、数度の交渉の末、山本あさ(21歳)、太田とくの(21歳)、濱口ふみ(21歳)、堀口まさの(20歳)、太田きその(19歳)、岩城きく(18歳)の6名を雇い入れることになった。いずれも20歳前後の若い女性であるのは、観客を集めたい博覧会側の要請もあっただろうが、海女漁期でもあり、ベテランは避け経験の浅い者が選ばれたのかもしれない。

雇用条件は、出発から帰村まで1人日給2円とし、往復8日間の旅費は三等汽車賃、車・馬の実費を支給、滞在中の宿舎・食費は博覧会協賛会側で負担する。実演中の服装は白色木綿製シャツと腰巻きで、桃色モスリン製海水浴着型、頭部被布、水眼鏡など、全て三

博覧会における「海女」一覧表

| 年次 | 開催期間 | 名称 | 開催地 | 海女館(形状) | 海女と獲物 | 備考(興行主、評判等) |
|----|------------|-----------------|-------------------------|---------|------------------|---|
| 1 | 大正5(1916) | 3/20～5/23 | 海軍水産博覧会(海の博覧会) | 東京 | 海底館 | 海女の鮑取り 海底館の浅海で海女のアワビ取りやサンゴ取りの実況(寺下) |
| 2 | 大正9(1920) | 4/1～5/20 | 全国勸業博覧会 | 京都 | 貯水池 | 鳥羽海女 貯水池で潜水、鯉鮒を捕まえる。 |
| 3 | 大正14(1925) | 8/10～9/18 | 市制10周年記念大連勸業博覧会 | 満州 | 海女館 | 真珠採取 迎賓館の東方。 |
| 4 | 昭和3(1928) | 4/15～6/3 | 海の博覧会 | 宮城 | 海女館? | 橋爪稿『ディスプレイ100年の旅』 |
| 5 | 昭和5(1930) | 3/20～5/31 | 日本海海戦25周年記念 海と空の博覧 | 東京 | 海の秘密館、大水槽? | 新しい見世物として海女館登場。大水槽(寺下)。 |
| 6 | 昭和5(1930) | 9/20～10/31 | 観艦式記念海港博覧会 | 兵庫 | 水族館 | 真珠採取実演(三重県 の海女4名) 三木水産副会長の斡旋で海女を招聘。都鄙人士を喜ばすこと限りな かった。 |
| 7 | 昭和6(1931) | 3/15～5/8 | 全国産業博覧会 | 静岡 | 水族館(竜宮城) | 三重県の数名の海女 水底作業の実演、公開大喝采。 |
| 8 | 昭和6(1931) | 7/11～8/20 | 小樽海港博覧会 | 北海道 | 海女実演槽(水族館 内) | 和具漁協5名、さざえ 他介類 幅36尺奥行9尺水深8尺5寸。図有。立錐の余地なき活況。雇用経緯。 |
| 9 | 昭和7(1932) | 4/12～6/5 | 産業と観光の大博覧会 | 石川 | 海女館 | 志摩海女 水槽で水中動作を観覧。建坪八十四坪。傍ら真珠其他海産物の売店。 |
| 10 | 昭和7(1932) | 9/15～11/10 | 満蒙軍事博覧会 | 愛知 | 海女実演館(竜宮城) | |
| 11 | 昭和8(1933) | 3/17～4/30 | 祖国日向産業博覧会 | 愛知 | 海女館(竜宮城) | 二十娘、真珠採取 経営者は神崎熊太郎。人気を集めて相当の成績。 |
| 12 | 昭和8(1933) | 3/17～5/10 | 万国婦人子供博覧会 | 東京 | 海女実演館(竜宮城) | 真珠屋隣。 |
| 13 | 昭和8(1933) | 3/20～5/21 | 奈良市制35周年記念観光産業博覧会 | 奈良 | 海女実演館(竜宮城) | 海女16名? |
| 14 | 昭和8(1933) | 4/9～5/28 | 第二師団凱旋記念満蒙軍事博覧会 | 宮城 | 海女館 | 海女館は人気(寺下) |
| 15 | 昭和8(1933) | 7/23～8/31 | 満洲大博覧会 | 満州 | 海女館(竜宮城) | |
| 16 | 昭和9(1934) | 3/25～5/23 | 国際産業観光博覧会 | 長崎 | 海女館 | 筆者所蔵の絵葉書より。 |
| 17 | 昭和9(1934) | 4/22～5/16 | 国産振興家庭博覧会 | 岡山 | 海女館 | 伊勢志摩海女数名 伊勢志摩海女数名が水中妙技を実演。 |
| 18 | 昭和9(1934) | 7/10～8/30 | 国防と教育博覧会 | 新潟 | 海女実演館(竜宮城) | 志摩海女、真珠 体育奨励、職業婦人、艶麗壮士の妙技。 |
| 19 | 昭和9(1934) | 10/10～? | 国防と産業博覧会 | 山形 | 海女実演館 | *新潟からの巡回展示。 |
| 20 | 昭和10(1935) | 3/25～5/13 | 新興熊本大博覧会 | 熊本 | 海女館(竜宮城) | 三重真珠湾選抜の海 女 斯界の連達福原氏の管掌、各地博覧会で好評。間口四間、奥行二間、水 深二十余尺。 |
| 21 | 昭和10(1935) | 3/26～5/24 | 復興記念横浜大博覧会 | 神奈川 | 海女館(竜宮城) | 鮑取りの実演/真珠貝 取り実演 入場数トップ。個人経営、鮮やかな妙技、魅惑的曲線美。真珠貝の参考資 料展覧、真珠の即売。 |
| 22 | 昭和10(1935) | 3/27～5/10 | 国防と産業大博覧会 | 広島 | 海女館 | |
| 23 | 昭和10(1935) | 10/10～ | 始政40周年記念 台湾博覧会 | 台湾 | 海女館(竜宮城) | 七五坪。台北市築地町一ノ九 福原方 藤井種夫 |
| 24 | 昭和10(1935) | 10/12～ 11/10 | 伊賀文化産業城落成記念 全国産業博 覧会 | 三重 | 海女実演館(×竜宮 城?) | 志摩海女、真珠 純白水着赤腰巻。横転逆転宙返り。喝采。真珠むき実演。 |
| 25 | 昭和11(1936) | 3/25～5/13 | 国産振興四日市大博覧会 | 三重 | 海女館(竜宮城) | 志摩真珠湾海女、真珠 貝 毎日数十回、盛況。真珠貝即売。 |
| 26 | 昭和11(1936) | 3/25～5/13 | 博多築港記念大博覧会 | 福岡 | 海女館(×竜宮城) | 特設館。 |
| 27 | 昭和11(1936) | 3/26～5/5 | 姫津線全通記念産業振興大博覧会 | 岡山 | 海女実演館(竜宮城) | |
| 28 | 昭和11(1936) | 4/15～6/20 | 高山本線開通記念日満産業大博覧会 | 富山 | 海女館 | 真珠貝採取作業実演 七〇坪。大人拾銭、小人五銭 |
| 29 | 昭和12(1937) | 3/15～5/31 | 名古屋汎太平洋平和博覧会 | 愛知 | 海女館(×竜宮城) | |
| 30 | 昭和12(1937) | 7/7～8/31 | 北海道大博覧会 | 北海道 | 海女館 | 海女館賑わい。 |
| 31 | 昭和14(1939) | 5/2～? | 興亜博覧会 | 香川 | 海女館(竜宮城) | 絵画(上半身裸体、赤腰巻)。 |
| 32 | 昭和14(1939) | 4/10～5/10 | 高田市興亜国防大博覧会 | 新潟 | 海女館(竜宮城) | 志摩真珠湾海女、真珠 |
| 33 | 昭和16(1941) | 7/25～8/28 | 酒田興亜国防大博覧会 | 山形 | 海女館(竜宮城) | 名古屋市和仁繁侍氏。海女神人の妙技。哀調の口笛。非常の人気盛況。 |
| 34 | 昭和23(1948) | 3/31～5/31 | 伊勢志摩国立公園 観光と平和博覧会 | 三重 | 文化館 | 外宮会場に文化館が特設、歓楽街に海女の実演サーカス。 |
| 35 | 昭和24(1949) | 3/15～6/15 | 日本貿易博覧会 | 神奈川 | 水中レビュー館(竜宮 城) | |
| 36 | 昭和24(1949) | 3/20～5/20 | 愛媛県産業復興松山大博覧会 | 愛媛 | 海女館 | |
| 37 | 昭和25(1950) | 4/3～5/31 | 婦人子供大博覧会 | 石川 | 海女館(竜宮城) | |
| 38 | 昭和25(1950) | 7/15～8/23 | 北海道開港大博覧会 | 北海道 | 潜水作業館(角形?) | 三重県海女実演 |
| 39 | 昭和29(1954) | 4/10～6/4 | 富山産業大博覧会 | 富山 | 海女館(海底作業館) | 真珠貝採集 富山市内爪坂敏雄。深い感銘。 |
| 40 | 昭和30(1955) | 9/21～11/11 | 天草産業観光大博覧会 | 熊本 | 海女館 | 真珠採取の実演 |
| 41 | 昭和32(1957) | 3/15～5/5 | 佐賀産業観光博覧会 | 佐賀 | 海女館(船形) | 真珠採取の興行館 入場料大人30円 |

*乃村工藝社情報資料室所蔵資料、同室HP等を参考に作成。

重県下で海女が通常使用する形式によった、とする。だが、当時の実際の海女漁は必ずしも白磯着を着していた訳ではなく、むしろ御木本が作り出した「公式」の服装に基づくものではなかろうか。実演は午前9時30分から午後8時30分まで、30分おきに毎回5分間、2人ずつが行う。各種の潜水動作と栄螺などの貝を採捕する実景を見せたとする。

この事例では海女と真珠との結び付きは見られないが、竜宮城風の「海女館」においては、真珠貝を採る海女の実演が一般化していく。昭和10年に横浜で開催された「復興記念 横浜大博覧会」では、閉会後の報告書において「前面を硝子板を以て囲まれた水槽中で、若い海女の、均衡のとれた肢体を翻して、水泡飛沫の裡に潜水する鮮やかな妙技、その魅惑的な曲線美は大衆を吸引するに充分であった」と報じられ、そして「場内には真珠貝の参考資料の展覧、竝に真珠の即売をなし好評を博した」とある。この館の経営は個人事業主であったが、恐らく真珠産業に関わる人間であっただろう。同年に伊賀で開催された「伊賀文化産業城落成記念全国産業博覧会」でも、「黒潮踊る志摩の海で鍛え(ら)れた青年海女が純白の水着に赤い腰巻きもなまめかしく浮きつ沈みつ真珠採取の実演と平素たしなみの横転、逆転、宙返りなど猟奇奇%の水中妙技を演じてやんやの喝采を博し」、そして真珠むきの実演も行われたと言う。水中で体を自由自在に動かす妙技と、彼女らが水底から採ってくる真珠が、海女館の目玉であった。この2年後に四日市で行われた「国産振興 四日市大博覧会」では、志摩真珠湾から招いた海女が潜って真珠貝を採る様子を実演し、「海女が水面に上りて吹く口笛は一種の哀調を帯び」たと記される。水槽中の実演では息継ぎのための磯笛を吹く必然性はなく、一種の演技であったろう(29)。そして館内で真珠貝を1個1円で販売し、人気を博したとある。1個4,50銭から数百円もする真珠が出ることもあったようで、一種の宝くじのようなものだったであろうか。

当時においても海女は決して志摩の専売特許ではなく、海女漁村は日本各地に点在していた。だが海女館の実演海女と志摩との結び付きは強い。海女の密度の高さでは志摩と同様に高い地に能登半島沖の舳倉島があるが、昭和25年に金沢市で開かれた「婦人子供大博覧会」のパンフレットでは、海女館の宣伝として「海女といえはすぐへぐら島の海女を連想しますが、なんといつても日本の代表的なものは三重県志摩半島の真珠貝採集の海女です」と断じ、志摩から金沢へ海女を招き、水中での妙技を披露するという。水中を潜る技能に関しては能登舳倉島の海女も遜色はないはずであり、真珠貝との結び付きこそが博覧会において志摩海女を特別な存在とさせ、わざわざ呼び寄せることになったのである。

なお、志摩に一番近い地での博覧会の海女実演としては、昭和5(1930)年に遷宮奉祝博覧会を契機に二見浦にて二見町が行った「臨海博覧会」がある。小規模なものだったようで詳細は不明だが、2月7日付の「伊勢新聞」の報道によれば「海底に潜入して魚介を採捕する海女作業の実演」がなされ、また開催期間中に県下の海女潜水競技大会が行われる予定という(30)。

博覧会で造られた多くのパビリオンのなかで、海女館は必ずしも王道の施設ではない。本来博覧会は、新たな産品や最先端の技術などを展示するものであり、ゆえに海女館は主催者直営ではなく、個人興行主による一種の娯楽施設として位置付けられることが多かった。だが、博覧会の様子を伝える絵葉書類では海女館がしばしば登場し、また終了後の報告書(会誌)などでも、海女館の人気の高さが語られる。例えば先に触れた「小樽海港博覧会」においては、「一般観衆の感興は、昼夜を通して此所に集中せられ観客先を争ふ

て毎回座席の占領に熱狂し、スタンドは常に立錐の余地なき活況を呈した」と伝え、昭和 10 (1935)年の「新興熊本大博覧会」では、「会期中の入場者九万七千三百三十人は有料館中最高のレコードを示した」としている。これが一部の例外ではないことは、同じ年に開かれた「横浜大博覧会」の「会誌」における海女館の説明文冒頭に「どこの博覧会でも、いつでも好成績を挙げて居るのが海女館であるが、本博海女館もその例に洩れず」と書かれていることでも明らかである。海女館は、博覧会を成功させるための、重要な人気興行だったのである。

さて、この時期には海外でも万国博覧会が開催され、日本製品も盛んに出品された。特に真珠は輸出品として重視され、御木本幸吉も博覧会への出品に熱心であった。それに伴ってであろうか、志摩の海女がアメリカなど海外に渡り、海女ショーを演じたことも、報告されている (31)。

昭和 14 年にはサンフランシスコで万国博覧会が開かれるが、この時に度会郡南海村の北村真珠養殖場が、真珠の即売店を出すことになっていた。そして万国博事務局は、博覧会のなかで海女作業を実演させることを企図し、海女の斡旋を依頼してきた。1月末には志摩郡浜島町の海女組合長・濱口佐兵衛氏の人選により、国崎村の太田しず (20 歳)、世古サト (18 歳)ら海女 3 名と付き添い 2 名が決まり、2月に神戸を出帆し渡米する予定で渡航免状の下付を県知事に願い出たところ、状況が一変する。日本女性の「裸体姿」を外人らの好奇の餌に供することについて、日本政府内部で反対の声が挙がったのである。「伊勢新聞」の論調も、当初は「海女作業を実演して碧眼をアツト驚かせやうとの企て」と好意的だったものが、4月 16 日の記事では「海女は見世物ぢやない」、「日本婦女子の裸体を碧眼の玩弄に供することは国辱であると物議をかもし」という書き方に一変する。そして志摩水産界の大立て者で、当時は三重県議を務めていた石原円吉のコメントを付しているが、「生業としての海女作業は別としてそれを興行にすることは以てのほか」と非難し、過去に北海道での博覧会で海女の出演要請があったが断固拒絶した、とする (32)。なお、海女館での海女は基本的にいずれも磯着をまとうっており、裸体姿ではない。石原円吉が非難する通り、見世物興行の対象とすること自体が問題視されたものであろう。

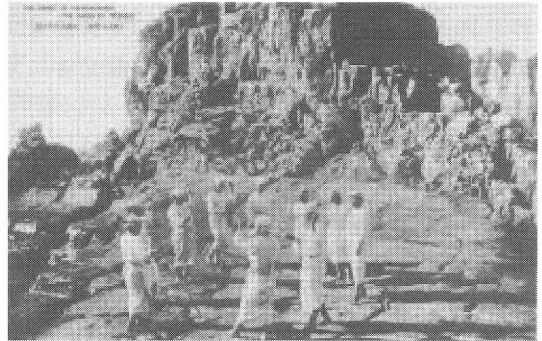
この事件は、政府の中止命令にもかかわらず、真珠加工技術員の名目で渡米した別の女性 2 人が、現地で海女の実演を行ってしまい、帰国後に旅券規則法違反として首謀者の神戸の真珠商人らが処分されることとなった。事件の経緯はともかく、こうした海女館の背後に真珠商人が居たことが確認できる。

志摩の海女たちが、どのような人的ネットワークに基づいて各地の博覧会に赴いたのか、詳細はつかめていない。ただ、海女館での実演に志摩水産会は否定的であり、また万国博覧会への真珠出品には熱意を見せ自己の養殖場で海女を見物させた御木本幸吉も、国内の博覧会の水槽で海女を見せることには消極的であったようだ。昭和 8 年 8 月に松阪で「市制実施記念三重県産業共進会」が開かれ、水族館で海女の作業の実演計画が立てられた。だが、実施当局の働き掛けにもかかわらず、御木本幸吉は自己の養殖場海女の派遣を断り、水産組合長の石原円吉も、理由は不明だが協力せず、結局水産試験場長の斡旋でようやく海女を確保することができた (33)。海女館の実演は、御木本や志摩水産会とは無関係に、真珠養殖産業や真珠販売が地域的に拡がり、博覧会を手掛ける興行師が活躍するなかで、仕掛けられたものと思われる。

海女館の海女の獲物が真珠であったのは、直接には博覧会という場の特質上、海産物ではなく工芸品の方が適当だったからであろう。だがそれは古代以来の伝承が基底にあり、御木本真珠養殖場で作業を見せた海女たちと相俟って、海女と真珠との結び付きは強まっていく。この時期にも志摩漁村の多くの海女たちは、魚貝や海草を採る漁業を営んでいたのだが、志摩の海女＝真珠採りというイメージが、徐々に定着していくのである(34)。

2、海岸・水族館での海女ショー

海女館は博覧会が開催される1、2か月間の臨時の興行であるが、海岸や水族館などで常設の海女実演も行われていた。著名なものが、福井県の東尋坊で行われていたものである。戦前期の観光絵葉書に東尋坊をバックに海女たちが踊っている図柄があるが、祭礼時に自分たちで楽しむ踊りではなく、明らかに観光客をもてなすためのものである。ここでは海女漁自体を見せるのではなく観光客が金銭を投げ入れ、それを拾って来る、という習わしがあった。戦後に活躍した文化人で詩人でもあった中村稔は、昭和19(1944)年に友人のいidemもと能登を旅行した時に宿でこの話を聞き、「りんりんと銭投ぐを止めよ」の句で始まり、また終わる、「海女」と題した哀愁を感じさせる詩を作った(35)。



《「絵葉書」(東尋坊の海女の手踊り)》

兵庫县城崎の日和山海岸に、昭和25(1950)年に遊覧施設の「竜宮城」が造られた。元々この地に海女文化はなかったのだが、竜宮城に不可欠な存在として、観光客向けに海女が招かれ、見世物ショーが行われることになる。当時の観光パンフレット(36)のなかに「日和海女音頭」という歌が記され、歌詞のなかに「志摩娘」の語が出ており、志摩から出稼ぎに来ていることは間違いない。彼女らは「竜宮城」で「海女音頭」を歌い、踊り、そして海中にも潜る。だが、魚貝を採るのではなく、観光客が投げ入れた盃を拾ってくるのである。この海女ショーは昭和62(1987)年まで行われていたという。詳細は不明だが、海岸での海女ショーは、他に香川県、鳥取県、山口県、愛知県などでも確認できる。

三重県内の水族館での海女実演に触れておこう。昭和5(1930)年に二見浦水族館が建てられた。現在開業している二見シーパラダイスとは別物で、二見の旅館街に連なる地にあった。ここでは海女の実演が売り物で、同館のパンフレット「二見浦水族館案内」(37)には「玉取姫ナラヌ真珠貝取りノ美シイ海女ガ水中深ク潜入シテ作業スル有様ヲ大水槽ノ横面カラ硝子ヲ透シテ見ル艶壯ナル実演ハ将ニ人気ノ中心トナツテ居リマス」と、玉取姫伝説を匂わせつつ真珠採の海女の「艶壯」さを宣伝している。また館内の売店では、実演館で海女が採取した真珠貝を販売していた。

昭和12(1937)年には、名古屋の角田半兵衛、千葉松太郎という人物により鳥羽町水族館が開かれ(現在の鳥羽水族館とは関係がない)、やはり海女実演が行われた。戦後、イルカ島や大きな旅館などでも海女ショーは行われ(38)、また県外の事例では、現在に続

く白浜や下関などでも見られた。

3、鳥羽志摩の「観光海女」

志摩半島沿岸の海女たちを取り巻く環境も変わりつつあった。鉄道網の発達や旅行ブームにより、観光の地として鳥羽志摩が盛んに宣伝され、そのなかで志摩を印象付けるため「真珠と海女の志摩」という惹句が用いられるようになる(39)。絵葉書や観光パンフレット類に登場する海女の様子を見てみよう(40)。

鉄道省が昭和2年に作成した「大阪から一二泊 名勝案内図」というパンフレットがある(41)。近畿一円から福井、三河にまで至る各地の観光名所のひとつとして鳥羽が紹介されるが、そこでは「鳥羽は鮑どこである。若布がとれる。従つて海女の本場である。又日本一の真珠貝の産地も程近い処にある」とし、菅島の海女の真珠貝取りを紹介した後、「答志島へ渡ると海女は喜んで其の舟にのせて作業を見せてくれる」とする。特に金銭報酬が絡むものではなく、海女たちの観光客に対する友好的な姿を伝えるものであろう。

発行年次は不明だが、戦前期で恐らく同時代のものと思われる「伊勢 新全集」という絵葉書のセット(42)は、「伊勢」と銘打ちながら志摩鳥羽の海女の姿も紹介している。鉄道会社の宣伝などにより、観光地として伊勢と志摩は結び付けられていく。大正から昭和前期にかけて、「海女ブーム」と言つて良い現象が起きており、それが伊勢志摩の観光の中心となった。これが、戦後の伊勢と志摩がセットになった伊勢志摩国立公園の指定につながっていくのである(43)。

さて、この絵葉書の写真解説で、御木本真珠養殖場で海女を多く雇用していること、鳥羽では菅島、答志島で海女見物ができるとした後、「又これを雇ひて獲物をとらすことも出来る」としている。さらに、昭和4年に大阪鉄道局が発行した「参宮案内」(44)には、伊勢参宮後の遊覧を紹介し、二見浦に続けて鳥羽について次のように記す。

鳥羽

二見浦遊覧を終つた人は是非一步を鳥羽に延ばすべきである。鳥羽の風光を探るには船によつて島廻りをし蟹女の生活を見るに如くはない。(中略)又蟹女の作業は菅島、答志島の海岸で数十人で競争的に漁をしてゐるのを見るに如くはないが、之は一寸望めぬから遊船事務所専属のものを頼むがよい。料金二人一組で一回四円位。一人傭へば二円五十銭位。遊覧船について沖の方へ出掛けると一人四円位、獲物は客にくれる。

実際の海女漁を見ることは難しいが、遊覧船の事務所専属の海女を雇うことは可能で、船から潜る様子を見物でき、しかもその獲物は貰える、としている。観光客向けの海女が存在し、彼女らを雇い、獲物を採つて貰うという形態の海女実演が行われていたのである。もちろん「見せる」ことで報酬を得る点で純粋な漁業とは言えないが、舞台は池や水槽などの人工施設ではなく、また獲物も予め用意された真珠貝や金銭、盃などでもなく、あくまで自然の魚貝物である。実際の海女漁業を見せるという点で、観光海女のなかでは最も健全な形で展開したものと言えるのではなからうか。

だが、海女に対する観光客の関心が高まり、海女人気が強まるにつれ、「見られる」海女が変質して行くのも必然であった。元々海女の居ない立神村で、昭和6(1931)年に遊覧

客向けにわざわざ海女の養成が試みられるのは(45)、まだ健全な方である。昭和14(1939)年6月25日の伊勢新聞は「海女の投銭を禁止」と題して、海女見物の弊害を報じている。「観光鳥羽になくてはならないものは島廻りと海女見物」であり、島廻りのポンポン船に海女を乗せ、適当な場所で行われる海女作業の見物は観光鳥羽の誇りであり、観光客の憧れでもあったが、何時の頃からか、海中を漁る海女さんに金銭を投げ、拾わせて面白がる風潮が広がり、通常の雇い賃以外にこの投げ銭が海女さんらの大きな収入源になってしまった。そのため海女さん側が投げ銭を当然視して要求するようになり、「海女とは海中に投げられた金銭を潜つて拾ふ職業」などという誤った認識さえ生じる。また、海女見物は高く付くとして敬遠する恐れさえあるとの指摘もあった。鳥羽警察署長は、「海女の銭拾ひは観光鳥羽の恥辱である、あれでは物貰ひも同然だ」として投げ銭を禁じる制札を立てると語っている。見世物小屋で、あるいは東尋坊などの海で海女に銭を投げる慣行が、志摩における実際の海女漁でも広まってしまっているのであった。

見世物小屋的な弊害は、銭を乞うだけではなく、性的な媚びという点でも波及している。特に志摩の代表的な歓楽街であった渡鹿野や浜島では、漁業者としてではない海女による観光客誘致が行われるようになった。昭和7年11月22日の「伊勢新聞」では、渡鹿野の貸座敷業者と口宿屋組合が志摩電鉄・参急(電鉄)と連絡を取って遊覧客の誘引に努めて来たが、このたび舞踏場を設置して娼妓を踊らせ、同時に地先の海中に鮑を放養し海女作業を行うという形で「海陸呼応」した旅客誘引策を講じた、と報じている。陸の娼妓と海の海女がセットとなって、観光客の宣伝に使われているのである。昭和9年2月6日には「猟奇渡鹿野島に硝子張りの浴場 海女の情緒的サービス」との見出しで、都会人の誘引策として海岸に30間四方のガラス張り浴場を新設し、その「サービスガール」に海女がもんぺ姿で接待することが報じられている。

昭和9年5月1日付の記事には、浜島町で「都の珍客の猟奇的好奇心をタツプリ満足せしめ様」との目的で、「南洋ぢや美人」を地で行く「海女踊り」なるものを創作して、この日からデビュー予定である、としている。観光客向けに作られた海女踊りは、やはり東尋坊や城崎の竜宮城でも見られたし、見世物小屋でも演じられていた。

なお、この時期には志摩について「猟奇的」という枕詞がよく用いられたが、これは志摩電鉄を中心に「猟奇の国、志摩」というキャンペーンが張られたもので、必ずしも海女のみを対象にした訳ではなく、また語義通りの意味内容でもない。南国の雰囲気、異国情緒程度のニュアンスの使い方であるが、しかし海女の蠱惑を含むものではあったであろう。

四、海女ブームの背景

1、海を眺める施設の発達

大正期から昭和前期に掛けて、海女が盛んに観光宣伝の資源として用いられるようになるが、海女人気、海女ブームが生まれたのには、この時期の社会一般に、人びとと海との関わりが前代とは大きく変わったことが背景にあったのではなかろうか。日本全体が、明治43(1910)年の『尋常小学読本唱歌』に「われは海の子」が発表されたように、海軍増強のなかで海への関心が高まっていた。ここでは、三重県周辺域に限定して、海が人びと

の娯楽の場として変容する局面のいくつかを見ておきたい。

まず、海を眺望する施設の発達が挙げられる。伊勢神宮の東南東、志摩国との境に位置する朝熊岳は、江戸時代には山上に鎮座する金剛証寺が、伊勢参宮に訪れた旅人たちからも信仰を集め、御師の接待システムも相俟って「朝熊かけねば片参り」と称されるほどの賑わいを見せた。だが、近代以降は参詣客も減少し、一時寂れてしまう。その状況を打破するべく、大正 14(1925)年に開設された朝熊岳のケーブルカーは、生駒山に続き日本で 2 番目の敷設で、東洋一の規模と讃えられたものである。当初は地元の有力者たちが計画したが、資金が十分に集まらないなどで失敗した後、生駒山ケーブルカー敷設にも関わった伊賀の実業家・田中善助の協力により成し遂げられた。現在でも伊勢から金剛証寺を経て鳥羽へ続く伊勢志摩スカイラインは、道沿いに広がる志摩の海の眺望が売り物であるが、当時もその景観の素晴らしさが盛んに宣伝された。「大正広重」と呼ばれた鳥瞰図作家・吉田初三郎が朝熊岳ケーブルカーを含む作品をいくつも残しているが、山頂から望遠鏡で海を眺める旅行者と、日本アルプスから富士山までの山脈を遠景として、中央に志摩の島々、夫婦岩、伊勢湾が描かれている。また朝熊岳山頂には見晴台やテント村、公園などが拡がり、御木本幸吉らが別荘を建てたことも知られる (46)。なお、このケーブルカーは戦時下の昭和 19(1944)年に線路の供出を余儀なくされ休止し、昭和 37(1962)年に正式に廃止となった。

海女実演ショーを売り物とする二見町の水族館が開館した 2 年後の昭和 7(1932)年に、二見浦の街中から後背にそびえる音無山に向けてロープウェーが開設された。これも宣伝パンフレットや絵葉書類を見ると、ロープウェーから、また音無山から、二見浦や志摩の海を眺めるための設備であることは明らかである (47)。

海の眺望だけでなく、海女とのつながりが明確に表れるのが、昭和 8 年に志摩電気鉄道によって架設された鳥羽の日和山エレベーターである。これは戦時中に一時休業するが、戦後復活し、昭和 49 年に鳥羽駅の火事で類焼するまで営業が続けられた。

この施設の案内パンフレット (48) に、次のような「日和山小唄」という歌詞が載っている。

一、ハア 日和山から鳥羽の海見れば ヨーイヨーイヨーイトナ
沖にチラホラ鷗か海女か 立つは鷗よ潜ぐるは海女よ
海女が潜ぐれば桶が浮く
サテ上り下りはエレベーター オヤ便利だね

エレベーターで日和山に上り眺める目玉として、海女が登場しているのである。なお、石阪洋次郎が昭和 8(1933)年から発表し人気を集めた小説『若い人』で、ヒロインの江波恵子が修学旅行で鳥羽を訪れ、日和山にのぼり鳥羽港を眺める場面がある。「日和山からみる鳥瞰図はクレパスの輝き…志摩の海底深く真珠貝の美しい幻想をこめて」という描写があり、日和山エレベーターに乗って、「志摩の海底」の真珠貝、それを通した海女への連想を思わせる。

伊勢から鳥羽に掛けて、この時期に相次いで海岸近くの高所へ観光客を運ぶ施設が造られ、そのいずれもが海の眺望を売り物にしていた。そして志摩の海の象徴として、海女が位置付けられていた。先に明治末年の「伊勢新聞」の記事で、鳥羽訪問の遊客の目的は「日和山の眺望と菅島の鮑取作業」にあるとの記述を紹介したが、まさにこうした観光客の期

待に応える態勢が整えられたのである。海が、そして志摩においてはとりわけそこで漁を営む海女が、眺められるものとして、観光客の注目を集めるようになった。

2、海水浴と海女

前近代に海で泳ぐという行為は、武芸者ら一部の特殊な人びとに限られた。難船時の水主の遭難記録などを見ると、海で働く漁民たちですら、必ずしも泳ぎに練達していた訳ではないことを思わせる。

海水浴は近代以降に、当初は海水を浴びることが健康に好影響を与えるという西洋医学の観点から始まったものである(49)。明治15(1882)年に軍医の松本良順により、二見浦が日本初の公認海水浴場になり、以後伊勢湾各地に広がっていく。明治末年頃には阿漕浦を始めとする津海岸が海水浴場の適地として知られるようになり、津市が「夏は津の海へ」キャンペーンを展開し、京阪地方からの臨海学校の地として賑わいを見せる。大正9(1920)年に開設された鼓が浦海水浴場は、山口誓子、佐々木信綱ら文化人の集う地となり、ゆかりの文人の歌碑が建ち並ぶ場となった。

この時期の海水浴場は、現在の遊園地の如く遊戯具が設置され、入浴場や食堂などが併設される一大娯楽場であった。夏期には様々なイベントが連日のように催され、都会からの観光客で賑わった。津市役所は「海水浴係」という専門の部署を設置し、海水浴施設充実のための「実行委員会」や、京阪神の臨海学校誘致を目的に「海岸宣伝委員会」を立ち上げ、ポスターを作り宣伝を繰り広げた(50)。阿漕浦と霞ヶ浦には競馬場が隣接しても居た。また鼓が浦だけでなく津海岸も「文化村」と呼ばれる空間が設けられ、文人たちの休暇スペースとなり、テント村なども発達した。この時期に新聞で度々報道される如く、当時の津海岸は、県下で一二を争うほど繁栄した観光地だったのである(51)。

だが海水浴場は、伊勢湾沿岸に関しては昭和30(1955)年の津の橋北中学校女子生徒集団遭難事件という不幸な出来事を契機に、また全国的にも進んだ学校プールの普及に影響され、伊勢湾台風などによる海岸砂浜の浸食、さらに鉄道網の変更やレジャーの多様化が決定的な要因となって、高度経済成長期以降、急激に衰えていく。

だが、20世紀の前半期は、明らかに民衆にとって新たな「海の時代」の到来であった。海水浴の一般化は、近代に生きる人びとの娯楽の形態を変えたが、それにより海で泳ぐのが身近なことになった。前近代までは、海で生業を営む者を除き、海は景色の一部か船で渡る場、精々が船上での遊覧の場に過ぎなかった。自らの全身を海に浸け泳ぐようになるというのは、人びとと海との関係において、大きな転換であった。海女という存在も、以前のような異世界の異能の民ではなくなる。そしてそれゆえにこそ、海中で自由に身を操ることの出来る特殊な技能に対して、新たな関心と評価が生まれたのではなかろうか。

津海岸など伊勢湾沿岸ではいまだ確認できていないが、湾を挟む対岸の知多半島で海水浴場における海女の姿を見ることができる。常滑の少し北、大野は古来「潮湯治」で知られた地で、明治15年に海水浴場となった。ここで戦後すぐから昭和34年にかけて、毎夏に鳥羽から海女が船頭や機関士、ガイドと共にやって来て滞在し、海女実演をしていた。だが大野海岸も遠浅の海で海女漁の地ではない。予め鮑や栄螺を海底に沈め、客を乗せた船で沖へ出て、海女が潜って採って来るといふ、伝統的なお決まりのショーである。

尾張大野史研究会によって当時の写真等が収集されており、また同会の高橋仁氏が高校生の頃に海岸でアルバイトをしたという経験を有し、詳しいお話を伺うことができた。高橋氏によれば、船にはスピーカーなど案内用の設備もあり、興行に慣れた様子であった、という。大野海岸のみの特別なショーだったとは考えにくく、鳥羽志摩から近隣各地の海水浴場に、海女を乗せた船が「観光海女」として出稼ぎをしていた可能性があるだろう。

料金は100円から300円くらい、なかなか盛況で家族連れの観客に人気であったという。肝心なことは、海中に潜る際に海女さんは半裸体であったことであり、その様子を撮した写真も残っている。だがエロチックな雰囲気ではなく、子連れの観客にも違和感はなかったし、高校生だった高橋氏も「そのようなものと思っていた」という感想であった。

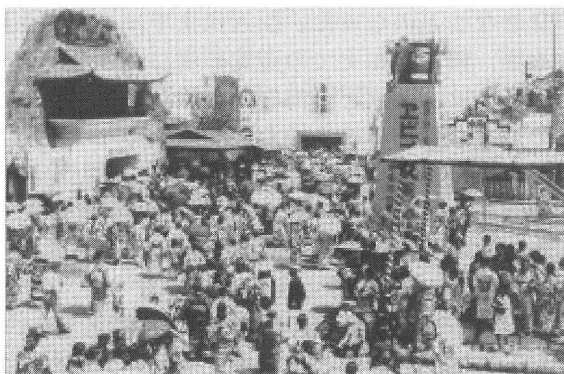
海で泳ぐことを主たる目的で集まった遊覧客は、自分たちには出来ない海女の姿、海中深く潜水し自由に体を動かす海女の姿に接して、一種畏敬の念を持ったのではなかろうか。

3、「観光海女」の魅力

ここで再び博覧会内の海女に注目し、彼女らの評判を見ておこう。海女館が多くの聴衆を惹き付けたのはなぜであろうか。博覧会資料を博搜し、膨大なコレクションをなした寺下勳氏は、橋爪紳也氏と共に編集した『別冊太陽 日本の博覧会』のなかで、昭和8年の「奈良市制35周年記念観光産業博覧会」の海女館について「海女が真珠などを採取するエロチックな様子が人気を呼んだ」とし、また戦後の昭和24年に横浜で開催された「日本貿易博覧会」では「裸の舞姫がエロチックに踊る水中レビュー館などがつくられ…」などと評している。近年では、宮崎の産業博覧会を中心に戦前期の地方博覧会を社会学的に分析した長谷川司氏が、「海女館の観客たちの興味は…濡れて透ける美人海女たちの裸体にあった」と断じている(52)。観光海女自体を取り上げたものではないが、外国の科学誌に紹介された海女や、海女の写真の変遷を辿った近年の論考も、基本的に視角は同じである(53)。

海女の魅力やその人気をエロチックな肢体に求めるのは一見分かり易い解釈だが、それは江戸時代の春画や明治期の猥雑な見世物小屋文化の伝統、近年の海女を表象とするポルノグラフィ、「芸者海女」などのイメージで連想しているに過ぎないのではあるまいか。歴史的な海女の見せ物でも、例えば二見浦で行われた海女の実演は、エロチズムを売り物にするものでは決してなかった。なぜならば、これを見物したのは確認できる限りいずれも皇室関係者で、しかも長橋局や皇后、女王らいずれも女性であったのである。

そして、例えば昭和9(1934)年に新潟で開催された「国防と教育博覧会」に際して、海女館前に行列をなす客の様子が絵葉書で取り上げられているが、よく見ると成人男子ばかりではなく、むしろ女性や子供姿が目立つのである。エロチックな魅力のみが売り物であれば、こうしたことはありえない。



《「絵葉書」(「国防と教育博覧会」海女館前)》

翌年開催された「新興熊本大博覧会」の絵葉書には、海女館前の宣伝看板に海女が潜水する様子が描かれているが、一種の曲芸の様子を表現してはいるものの、必ずしも女性的要素を強調してはいない。

「国防と教育博覧会」の絵葉書には、海女館前に掲げられた看板が小さく写っている。拡大してできうる限り解説したところ、次のような内容が読み取れた。

一、体育奨励トシテ

一、職業婦人トシテ

一、水中スポーツ(シテ)

一、国産真珠ノ真価宣伝[]

中□三重県志摩国ノ美人海女カ硝子館ノ大水槽中□玉取姫カ浮テハ沈ム艷麗壯快□□

□海女入神ノ妙技

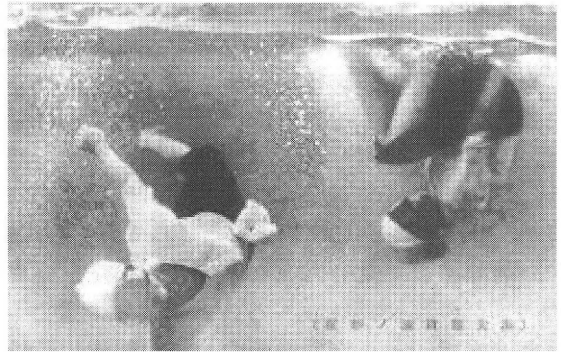
大人 十銭

中人 □□ 団体 □割引

小人 五銭

海女実演館

「国防と教育」を謳った博覧会におけるパビリオンということが影響したかもしれないが、海女の実演が、真珠販売を目的とするだけではなく、「体育奨励」「水中スポーツ」としての面が宣伝されているのである。ちなみに、昭和9年に長崎で開催された「国際産業観光博覧会」において、海女館水槽中における海女の一連の様子が8枚の絵葉書になっているが、さながら現代のシンクロナイズドスイミングのようである。



《「絵葉書」(「国際産業博覧会」・海女館実演)》

大野海岸で行われた海女実演を見る海水浴客は、自分たちには出来ない練達の泳ぎ、潜りを、驚嘆の思いと共に見たであろう。もちろん、どんな姿格好をしようと、そこにエロを見出す人が居ただろうことは否定しない。だが、少なくとも海女の実演を見る多くの人たちには、海女の類い希なる技能に対する驚きが根底にあった。

井上章一氏が指摘するまでもなく、戦後しばらく、20世紀の半ば頃までは、ハイソサイエティを除き庶民レベルでは女性の半裸体姿は珍しいものではなかった(54)。そうした社会状況のなかで、性的な関心のみからわざわざ博覧会や海岸に訪れ、金銭を払い海女を見物するであろうか。江戸時代に幕府の風俗統制下、禁断の春画を買うのとは次元が違う。しかも博覧会の海女は基本的に磯着姿で、半裸体ですらなかったのである。

「体育奨励」「水中スポーツ」は宣伝看板の文句に過ぎないのではなく、海女を「アスリート」として見る眼は、確かに存在した。海女の見物人の発想ではないが、海女を「水中スポーツ」として位置付ける試みが実際にあったのである。幻に終わった1940年の東京オリンピックの準備過程において、昭和11(1936)年に、海女の潜水競技を行う計画が東京のオリンピック本部に持ち込まれている。同本部では、他国の参加が困難で競技に加

えることは難しいが、志摩の海女のみで競技をして世界に紹介することは賛成する旨の意向を示した。この提案をしたのは、志摩水産会長で当時は三重県議会議長を務めた石原円吉で、三重県の山本衛生課長、高屋体育運動主事らと共に申し入れたようだ。彼は、海底作業の進歩を図るために必要な競技であり、ガラス張の透明な大タンクを備えて潜水を独演させると語っている。

その3年後に前述のサンフランシスコ万国博での海女実演問題が発生しているのだが、石原円吉は志摩水産会長として猛反対し、県内の漁業組合に対して「国宝的存在である神聖なる海女作業を、心なき事業家の宣伝用具に使用されることのないやう」自戒を促している。彼は海女を「県土産業の第一線戦士」とも表現しており、単なる漁業者だけではない、観光面の宣伝効果も十分承知していた。だがそのセールスポイントは、卑俗なものであってはならなかったのである。

おわりにー海女の魅力とは何かー

「観光海女」の歴史を辿ってみた時、見物される海女を性的な魅力からのみ論じるのは短絡であることはもはや明らかだ。ジェンダーやセクシュアリティの理論的枠組みに海女を無理やり押し込んで、海女の実態からかけ離れていってしまう。

確かに前近代の浮世絵を始め、海女の半裸体の姿を強調し、それを売り物にする文化は根強く存在した。近代以降には、エロチックで、そして川魚を掴まえて踊り、歌うことを強いるような実態とかけ離れたグロテスクな海女見世物が、都市を中心に流行した。それらに呼応して、海女生業の地でも男性観光客に媚びる海女のサービスが発生してはいた。だが、海女館で演じる海女、オリンピックの競技化が検討された海女、大野海岸で海水浴客の前で潜って見せた海女、彼女らを見る観客は、現代のサーカスやシンクロナイズドスイミングの妙技に感嘆するのと同じように、「アスリート」として賞賛する感覚を持っていたはずだ。大正末期以降の「海の時代」には、海が人びとにとって身近なものとなり、水中を泳ぐことが「スポーツ」としての観点から評価されるようになった。

その前提として、前近代の海女イメージ自体に濃厚な異能性が存在した。通常の間とは異なり海中を自由に泳ぎ回る海女は、陸上と海底の世界とを結び、また海中の魚介類とも交わりうる両義的な存在として、玉取姫伝説や竜宮城譚のなかに位置付けられた。浮世絵に描かれた海女に注がれる視線も、性的なものばかりではなかっただろう。そして「海の時代」の到来に伴い、自分たちと同じ人間存在が普通の者にはない特殊な能力を持っているという認識が、一種の畏敬の念を新たに海女たちに及ぼしたのである。

もう一点留意したいことがある。二見浦での海女実演や鳥羽の海で観光客の求めに応じて海底に潜る海女たちは、性的な魅力、異能の技術を有する者というだけではない魅力を持っていたはずだ。それは何より、自然界より獲物を採ってくるという、生業それ自体の特質にある。海女館などの海女実演も、それを擬製的に示すものであった。

人間は本源的に収穫の喜びを味わうものである。リンゴ狩りやブドウ狩り、芋掘りなど体験型の農業販売の人気は、単に安く食べられるということだけではないはずだ。食料品を自然界から採取する直接的な体験は、それ自体が魅力的である。

海岸で網漁や釣りの現場に居合わせると、暫く立ち留まって見物してしまう人は少なくないだろう。だが、それらはまだ手の届く範囲ではある。常人ではなしえない形態で自然界からの収穫が行われる時、それは一種の「あこがれ」として、特別な見物対象になる。

現代において、一般に生きる人びとと第一次産業との間隔は、時と共に広がっている。第一次産業自体が機械化の進行により、自然の産物との直接的なつながりが希薄になりつつある。漁業でも動力による船舶と網、魚群探知機のようなハイテク機具が不可欠になり、農村にはコンバインやトラクターが普及して、昔ながらの稲苗の手植えや鎌での稲刈りは稀になった。林業も同様の傾向があろう。

生産活動のなかでの海女の希少性とは、簡便な道具のみで身一つの素潜りにより、通常の人間には手の届かぬ自然界から食物を採って来るといふ、狩猟採集活動の原点にある。海洋国日本として、海女の魅力を探るなかで、人間と海との関係を再考すべき時代を迎えているのではなかろうか。

[注]

- (1) 瀬川清子、和歌森太郎、岩田準一らの調査・記録を念頭に置いているが、ここでは海の博物館が発刊した『海と人間』6号(1978年)に収められる「志摩の海女に関する文献目録」を紹介するに留めたい。
- (2) 拙稿「古文書史料から見る海女の歴史的事実」(『海女習俗基礎調査報告書』三重県、2012年)で部分的に言及した。
- (3) 東日本大震災前には岩手県の久慈でも行われ、一時は「可愛すぎる海女」ブームに沸いた。当地では漁業者としての海女漁は年間わずか2日に過ぎず、「観光海女」が主たる形態だといふ(海の博物館館長の石原義剛氏から御教示を得た)。
- (4) 「海人ものがたり」(中村由信『日本の海女』、マリン企画、1978年に所収)。
- (5) 歌川国芳の浮世絵を紹介するものは多いが、鈴木重三編『国芳』(平凡社、1992年)を参照した。
- (6) 鈴木弘弘「海女にからみつく蛸の系譜と寓意—北斎画「蛸と海女」からみる春画表現の「世界」と「趣向」」(『日本研究』38、国際日本文化研究センター、2008年)において、玉取姫伝説が神話伝承や縁起物、謡曲、雑俳文化などにより受け継がれ、影響しつつ、「海女と蛸」のモチーフに展開していく系譜が分析されている。
- (7) 臨川書店刊、1998年。
- (8) この誤った記述は式亭三馬「阿古記物語」などにも受け継がれており、こうして伊勢湾に海女が存在するかの誤解が、改めて都市社会に広まっていったものと思われる。
- (9) 三重県史編さんグループ架蔵の写真版を利用した。
- (10) 「神宮編年記」(神宮文庫蔵)。
- (11) いずれの御師も神官の最上級のクラスである。
- (12) この件に関して、ミキモト真珠島真珠博物館館長の松月清郎氏から、二見浦は茶屋で売る栄螺の壺焼きが有名であるが、この地で栄螺は採れない。鳥羽から船で栄螺と共に海女を乗せ、二見浦で海女実演を興行した可能性もあるのではないかと、との御教示を頂いた。確かに、古市を中心に見世物文化が盛んな伊勢に近く、かつ参宮文化とも関わりが深い名所・二見浦で、何の興行も行われなかったというのは却って不自然

な感もある。この点は更なる史料探索を図りたい。

- (13) 以下、明治期の見世物文化については、史料を含め、「蹉跎庵主人」なる方によってHPで公開された「見世物興行年表」の成果に負うところが大きい。『明治の演芸』や『近代歌舞伎年表』を基本としつつも、大阪府立中央図書館、同中之島図書館、国会図書館関西館等で所蔵する新聞資料マイクロフィルムをも検索した労作である。
- (14) 大阪千日前の開発過程については、橋爪紳也『明治の迷宮都市』（平凡社、1995年）。
- (15) 『見世物関係資料コレクション目録』（国立歴史民俗博物館、2010年）。
- (16) 織田作之助が昭和15(1940)年に『文学界』に発表した短編小説「放浪」で、主人公の少年順平が、大阪千日前で「海女の実演」を行う見世物小屋に入り、「海女の白い足や晒を巻いた胸のふくらみをじっと見つめていた」との記述がある。だが、ここで演じられている海女は半裸体ではなく、胸には晒しを巻いていることにも注意しておきたい。
- (17) 「伊勢新聞」明治44(1911)年3月13日、15日、16日付記事。伊勢新聞の検索は、三重大附属図書館架蔵の紙焼き版による。なお明治・大正期の海女に関する伊勢新聞記事については、拙稿『伊勢新聞』に見る近代の志摩海女—明治・大正期の「海女」の諸相—（『三重大史学』11、2011年）で一覧データを示した。
- (18) 「伊勢新聞」。
- (19) ミキモト真珠島真珠博物館が所蔵する、明治27(1894)以降昭和38(1963)年までに至る、20冊を超える真珠関係新聞記事のスクラップ資料に拠る。これは真珠産業の発達史の上だけでなく、近代の新聞資料としても貴重なものである。
- (20) 宮本常一は前掲「海人ものがたり」において、志摩の海女たちが明治期に朝鮮半島へ出稼ぎに行き、济州島海女と接触したことが半裸体から転換した契機だとするが、確実な話ではない。
- (21) 二見浦と海女見世物との不思議な結び付きは江戸時代以来のもので、伊勢参宮文化との関わりで考えざるを得ない。
- (22) 「大阪毎日新聞」の報道によれば、300個の真珠貝を沈めておいたという。
- (23) 「伊勢新聞」6月23日付記事。
- (24) この時期の博覧会の概略を知るには、寺下勅コレクションを紹介した橋爪紳也監修『別冊太陽 日本の博覧会』（平凡社、2005年）が便利である。そのなかでいくつかの博覧会における海女館の写真も紹介されている。
- (25) 別表「博覧会における「海女」一覧表」は、博覧会の開設期間や場所などは乃村工藝社情報資料室のHPで公開されているデータを基にして、同室所蔵の博覧会資料を参考に作成した。以下、特に断らない限り、博覧会に関する記述は同室所蔵資料に基づく。
- (26) 『別冊太陽 日本の博覧会』では、この時から海女館が登場するとしているが、乃村工藝社社史編纂室編『ディスプレイ100年の旅 乃村工藝社100年史』（1993年）によれば、海女館が博覧会に初めて登場するのは昭和3年に宮城県塩釜市で開かれた「海の博覧会」だとする。だが、この博覧会に関する資料から海女館の存在を確認することはできなかった。また、公式記録『日本海海戦25周年記念 海と空の博覧会報告』（1930年）には、「海の秘密館」についての記述はあるものの、やはり海女館も海

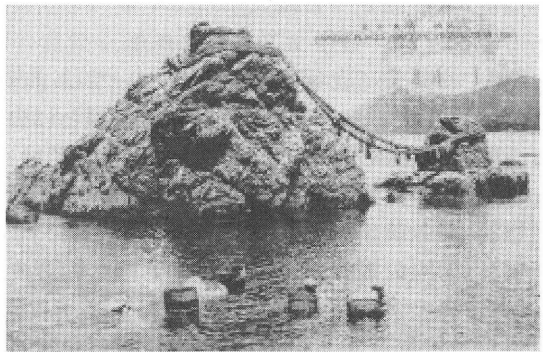
女も確認できない。因みに、この時は御木本商店が真珠標本を出品している。なお、大正 14(1925)年に当時の「満州」大連市の大連西公園で開かれた「市制 10 周年記念大連勲業博覧会」で、真珠採取を実演する「海女館」が設けられた記録がある(『大連勲業博覧会誌』、大連市、1926 年)。

(27) 「奇想天外」な見世物を目指した者たちの世界は、「ランカイヤ」から博物館展示ディスプレイの代表的企業となった乃村工藝社の社史『七〇万時間の旅』Ⅱ(非売品、1975 年)、また社史の編纂にあたった清水章氏による『日本装飾屋小史』(創元社、非売品、2006 年)に詳しい。なお、『七〇万時間の旅』Ⅱによれば、昭和 7 年に名古屋で開催された「満蒙軍事博覧会」は創業者である乃村泰資が企画し、海女館を含めすべて乃村の手によって特設されたという。明確な記述はないが、2 年後に新潟市で開催された「国防と教育博覧会」、その巡回展示である山形市での「国防と産業博覧会」(両方とも海女館が建造された)も乃村が請け負ったようであり、また元々は主要施設よりも娯楽特設館の請け負いを得意とした、とも記される。なお「新興熊本大博覧会」のガイドブック『くまもと』(同博覧会協賛会、1935 年)中にある「海女館」についての「概説」では、「当海女作業実演館は斯界の練達福原氏の管掌するものにして各地博覧会に在つて噴々たる好評を博したるものなり」として、各地の博覧会で巡回している興行師の存在が伺える。「三重県真珠湾より選抜されたる優秀なる海女達」との記載もあるが、彼ら興行師が海女の雇用まで担当していたのかは分からない。

(28) 『小樽海港博覧会誌』(1931 年)。この博覧会では「海女館」という名称はまだ用いられず、「海女実演槽」としている。

(29) 磯笛についての記述は昭和 10 年熊本で開催の「新興熊本大博覧会」でも見られる。

(30) 再三記すように、二見浦は実際には海女漁が存在しないにもかかわらず、絵画や見世物文化のなかでは海女漁と濃厚なつながりを示す場であった。実は二見浦の夫婦岩を背景に海女が潜る写真を用いた絵葉書がある(筆者蔵)。「4. 4. 1」(昭和 4 年 4 月 1 日か?)のスタンプ印が捺されているのだが、これは実際の海女漁の様子ではなく、何らかのイベントにおける海女の実演ではないか、と考えている。



《「絵葉書」(二見浦の海女作業)》

(31) 福田清一『志摩と朝鮮を小舟で往復した志摩の海女 北は礼文・利尻、南は八重山まで往った志摩の海女たち』(私家版、2006 年)は、聞き取り調査に基づき、志摩の海女たちが「スイリ」と呼ばれた実演ショーに出稼ぎに行ったことを紹介する。その早い例として明治 28(1895)年に片田村の伊東りきらが 2 度目の渡米後にサンフランシスコ郊外で海女ショーを演じたと伝えるが、確証はない。昭和 10 年前後には全国各地の博覧会に「スイリ」に赴いた海女が居り、海女の募集や現地との交渉を牛耳った、英虞郡船越村の田中幸吉という興行師の存在も指摘している。また、同時期に朝鮮半島や中国の各地に盛んに「スイリ」に行ったとして現地での写真を掲載している。海

- 外で行われた日本海女の実演ショーは、国内の博覧会におけるものとは別の意味を伴い興味深い、大正 14 年に大連で開かれた博覧会の事例以外は文献史料で跡付けられていない。今後の課題としたい。
- (32) 過去の北海道での博覧会として該当するのは、昭和 12 年 7 月から 8 月に開催された「北海道大博覧会」だと思われる。
 - (33) 『松阪市制実施記念 三重県産業共進会会誌』（1933 年）、三重県史編さんグループ蔵。
 - (34) イタリアの文化人類学者、F・マラーニが 1960 年頃に志摩を訪れた時、真珠島の「全く観光客のためにだけ働いている」海女しか見ず、失望してすぐに去り、初島、御宿を経て舳倉島でようやく目指す「ほんもの」海女に出逢い、本格調査に入ったという（『海女の島—舳倉島—』未来社、1964 年）。当時、志摩では依然として数千人の漁業者たる海女が存在していた筈だが、それほどまでに志摩と「真珠海女」が結び付けられてしまっていたのだろうか。あるいは、磯着が普及していた志摩海女には関心がなかったのかもしれない。
 - (35) 『中村稔詩集 続』（思潮社、1996 年）所収。なお当地で海女を営む大井七世美さんが先輩海女から聞いた話によると、海中にキラキラと光りながら沈む貨幣を見付けてそれを掴む技能の高さに誇りを持っていて、卑俗な芸ではなかった、という。
 - (36) 筆者蔵。
 - (37) 海の博物館蔵・森コレクション。
 - (38) 川口祐二『甦れ、いのちの海』（ドメス出版、2007 年）に、安楽島の海女が戦後に近くの観光施設に造られた水槽中で魚の餌付けショーを演じた話を紹介している。
 - (39) これは 2 つの観光の目玉を並列しているのであるが、前述したように「真珠海女」のイメージも伴うことになった。
 - (40) 絵葉書に登場する海女については『三重県絵はがき集成』（樹林社、2006 年）に紹介されており、「当時、都会の人びとにとって未知の存在であった海女の姿が珍しく、絵はがきは飛ぶように売れた」としている。
 - (41) 海の博物館蔵・森コレクション。
 - (42) 筆者蔵。
 - (43) 国立公園指定には、御木本幸吉の奔走も与ったことはよく知られている。
 - (44) 海の博物館蔵・森コレクション。
 - (45) 「伊勢新聞」昭和 6 年 9 月 16 日付記事。賢島の鳩丸船長尾崎勘四郎氏の指導の下、立石浦において練習に精進している、と報道されている。
 - (46) ただし御木本幸吉は、田中善助との関係からか、ケーブルカー敷設には必ずしも好意的ではなかったようだ。
 - (47) 二見旅客索道株式会社が運営したものであるが、昭和 17(1942)年に廃止となる。
 - (48) 筆者蔵。
 - (49) 明治期における海水浴場の拡がりについては、長尾哲三編著『日本転地療養誌』（吐鳳堂、1910 年）が参考になる。
 - (50) 物理学者の湯川秀樹が京都一中時代に津海岸を訪れた回想を記している（『旅人 ある物理学者の回想』、朝日新聞社、1958 年）、また洋画家の村山槐多も、京都師範学校

附属小学校時代に津海岸で遊んだ時の日記を残した（「磯日記」『村山槐多全集』、弥生書房、1963年、所収）。また津市の海水浴場経営が本格化する以前の段階の記録として興味深い。

- (51) この時期における津海岸の賑わいは、吉田初三郎が描く鳥瞰図やパンフレット類、また新聞記事などでも跡付けることができるが、大正13(1924)年に津市役所が発行した『津市案内記』には、「市の海岸経営」と題して、大正12年から津市は海岸経営に本格的に力を入れ、土産物展覧会、無料渡船、水泳大会、夏期大学・海浜学校などを行い、市民有志も市当局と協調して夏期事業協賛会が設立され、贄崎、阿漕浦の海水浴場において余興として活動写真、手踊り、相撲、奇術曲芸、鞆鼓踊り、花火大会などが行われたことを伝える。また名古屋新聞社と津市が連携して阿漕浦に「平治村」と命名されたテント村が設けられ、食堂売店、浴場、娯楽室などを整備し、「平治村十則」という規則に基づき運営されたとも言う。大正14年に出された鈴木敏雄『伝説の津市』によれば、ゴルフ、マージャン、ピンポンテニスの施設に電信電話の通信機、市内からのバス連絡、そして楯干漁の楽しみがあることを強調する。いずれも、市や市民、企業らが連携した企画による海の賑わいを伺うことができる。
- (52) 「戦前地方博覧会における地域イメージの構築—祖国日向産業博覧会（1933）のケーススタディー」『総合政策研究』31、2009年3月、関西学院大学）。
- (53) 木暮修三「海女の表象—『ナショナル ジオグラフィック』に見るオリエンタリズムと観光海女の相互関係」（『日本研究』39、国際日本文化研究センター、2009年）は、アメリカの科学雑誌において、戦前までは真珠養殖場の職業女性として紹介されていた海女が、第二次大戦後には非欧米人種への性的視線に基づく内容が変わることを論じ、その背景に日本の海女が観光地におけるサービス産業化していった社会環境があったとした。海外のメディアの日本海女の表象を詳細に分析した労作ではあるが、やはり「見られる海女」については専ら「性的視線」という観点のみで論じられている。菊池暁「誰がために海女は濡れる—日本海女写真史略—」（川村邦光『セクシュアリティの表象と身体』臨川書店、2009年）も、意図を持ってカメラマンによって撮影され、鑑賞される写真という媒体を対象にするからではあろうが、「見てもいいエロ」の需要に応える「合法的周辺ポルノ」という考え方で海女の写真を位置付けている。
- (54) 「見られる性、見せる性ができるまで」（『岩波講座 現代社会学 10 セクシュアリティの社会学』、岩波書店、1996年）。

[付記] 資料閲覧に際しては、海の博物館、ミキモト真珠島真珠博物館、神宮文庫、三重県史編さんグループ、乃村工藝社情報資料室（石川敦子氏）にお世話になった。尾張大野研究会の高橋仁氏からは、貴重なお話を伺った。吉村利男氏からは、資料の所在について種々御助言を頂いた。本稿の概要は、2011年10月29日に海の博物館にて開催された「三重大学・鳥羽市・海の博物館 文化フォーラム」において報告し、出席された関係者や各地の海女さんから、貴重なご意見を頂いた。合わせて、御礼を申し上げたい。

（つかもと あきら 三重大学人文学部）